

「イスラーム的」共存構造における 社会集団間関係

——ジェルバ島のユダヤ教徒コミュニティから——

田村愛理

1. はじめに

本報告は、1993年と1994年の春の二回に分けて、延べ一と月にわたって行なわれたチュニジアにおける現地調査の概要である。調査の報告に入る前に、筆者の研究意図をまず述べておきたい。

冷戦体制が崩壊し、国民国家システムが揺らぎつつある20世紀末今日は、地域統合や非国家組織間の紐帯の重要性が喧伝されるとともに、民族問題や宗教問題が人間集団間の現実の相克を相も変わらず悲劇的にまで高めているという逆説の最中にある。このような現況にあつて、社会あるいは人文科学諸学問の緊急の課題の一つは必然的に、異なる文化的背景を背負った人間諸集団の共存をいかにして可能たらしめるのかという問題に収斂しつつある。筆者の研究領域であるイスラーム地域研究においても、近代化以前のイスラーム的共存システムや多元構造への関心が高まっている。イスラーム的共存システムの特徴は、民族にではなく宗教に統合の基準がおかれ、ムスリムが優越してはいるが、非ムスリムをズィンミー（契約の民）として保護するシステムの下に諸エスニック・グループがゆるやかに補足され、非ムスリムの従属的諸グループもジズヤ（人頭税）などの納税の義務を果たす条件で、同化を強制されることなく独自の宗教・言語・生活習慣・法を保ちつつ共存していた、と説明されている⁽¹⁾。しかし、なによりも民族が人々の感情的紐帯の源泉となっている国民国家システムにある今日では、実際に人々がどのようにいわゆる「イスラーム的」統合による共存システムの中に生きていたのかを理解するのは容易なことではない。特にオスマン帝国とは逆に、近世以降宗教的凝集力が政治的意図を持って希薄化されてきたため、宗教に対する理解の乏しい日本の現状ではなおさらである。民族を前提としない人間集団のあり方とはどのようなものなのか、かつて確かに存在したイスラーム的共存システムは、異文化間紛争を抑制する一つのヒントとなりうるのか。今日の極めて限られた地球という自然環境の中で、文化を異にする諸集団の共存はどのような条件の下に可能になるのか、あるいは逆にどのような条件が、異文化集団間の紛争を引き起こすのだろうか。

筆者の関心はまさにここにあり、過去にエジプトにおけるキリスト教徒コミュニティやマレーシアにおけるインド人コミュニティ等のマイノリティ・コミュニティの研究を進めてきた⁽²⁾。これらの研究においては、それぞれのコミュニティが、国民国家システムにどのように組み込まれていくのかという問題を、近代政治のインター／イントラ・コミュニティ関係から論じたが、実際に個々のコミュニティ・メンバーの生き様やルサンチマンを描くことはできなかった。本報告

では、上に述べた問題関心を基礎に、チュニジア南部、ジェルバ島のユダヤ人コミュニティの祭礼調査において聞くことのできた、我々とは異なる集団形成の歴史を持ち、今もそのシステムを保持している宗教的マイノリティ・コミュニティ内部の様々な階層、世代の人々のモノログを中心に紹介したい⁽³⁾。

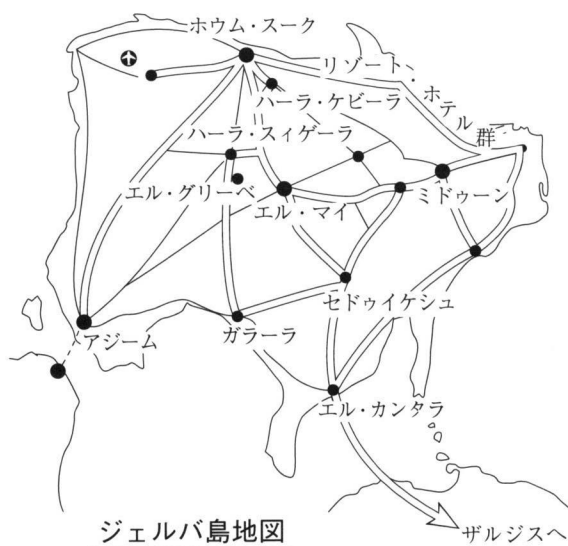
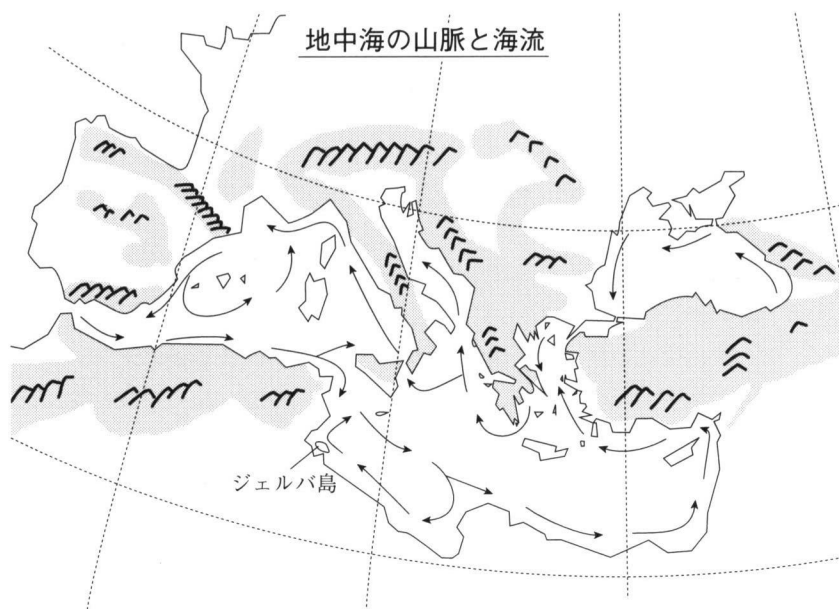
2. ジェルバ島の地理と歴史

イ) 地理的特徴

チュニジアは北アフリカの地中海に面した、総面積 164, 150 平方キロの小国である。しかし、そこはシチリア海峡により地中海が東と西に分割される境界線であり、またアルプス褶曲に連なるアトラス山脈とサハラ台地の境界地域でもあり、海、山岳、乾燥ステップ、オアシス、砂漠という中東イスラーム地域に広く見られる多様な自然地理と生態環境が、狭い地域にコンパクトに展開している。そのため、異なる自然環境と生態系、その影響を受ける諸生活形態と社会構造を繋ぐクロスカルチャ・システムを観察するのに適しているが、中でも調査の中心となったジェルバ島は、多様な生態系と生活形態の多元的共生社会のモデルとも言える地域社会をその小さな島の複雑な歴史を通じて形成してきた。

ジェルバ島は、チュニジアの首都チュニスから南へ 450 キロ、リビアとの国境に近いガベス湾に浮かぶ面積 140 平方キロ、周囲 150 キロほどの小島である。現在ジェルバ島へ行くには、空路、フェリーのほか、対岸のザルジースとの間を埋め立てて道路が造られている。不整四辺形のこの島は、地中海で 10 番目の面積を持つが、その最大の地理的特徴は、海拔が最高でも 55 メートルしかないほぼ水平な島だということにある。起伏が少なく、地中海式とアフリカ砂漠気候の特色を合わせ持つこの島には水源となる川や湖沼が存在しない。したがって、居住者の生活は地下水と平均降雨量 210mm/年の雨に支えられ、古来自ずと居住人口が制限され、7 万人以上の人口を支えるのは難しい。1975 年の人口は、74,600 人とされているが、実際にはかなり多く、おそらく半分近くが、出稼ぎとして島外に流出しているという⁽⁴⁾。もしこの見解が正しいとすると、島の人口は、フランスが人口を調査した 19 世紀後半から百年近くほぼ変化がないということになる⁽⁵⁾。

島内に広がる平坦な耕地には、多様な植生分布や栽培植物が見受けられる。この島は、古来オリーブ・オイルの生産地として有名であったが、地中海原産のオリーブやイチジク、ナツメ椰子の他に、ナシ、リンゴも見られる点で特異である⁽⁶⁾。その他、既に 10 世紀にはバナナ、柑橘類、亜麻、綿花などの多くの熱帯原産の有用植物も移植・導入されていた。またそこは、羊毛、絹・綿織物、ハルファ（アフリカ・ハヤガネ草）のゴザ、敷物、皮革加工品、陶器、貴金属加工品等の特産品の生産地としても昔から著名である。このような条件から、ジェルバ島は、地中海の海上交通とサハラ砂漠横断のキャラバン交通の交差する場として、歴史的に重要な交易センターとなり、地中海、アラブ、アフリカ系等、多様な背景を持つ人々の交換・交流の結節点としての役割を果たしてきた⁽⁷⁾。その結果、国民国家全盛の今日にあっても諸民族、諸宗教・宗派が混在／共存／棲み分ける多元的社会が形成されており、中東におけるマイノリティ集団であるユダヤ教徒やイスラームの少数宗派ハワーリジュ派の中の分派であるイバード派の拠点として知られているが⁽⁸⁾、とりわけこの島の複合文化的特徴を明白に体現しているのが、島の長い歴史と共に生き



抜いてきたユダヤ人コミュニティである。

ロ) 歴史的経緯

この島の居住の歴史は新石器時代から始まっていたが、歴史時代に入ってから、ギリシャ人、フェニキア人達も頻繁に訪れ、なかでもホメロスの叙事詩で英雄オデッセウスが漂着したロータス島として有名である。その後紀元前4世紀には、ヘロドトスもこの島についてその書物の中で言及している。紀元前3世紀に古代カルタゴの支配下に入ったジェルバ島は地中海のどこよりも干満の差が激しい事から、メニクス（潮の引く島）という名で知られた。遠浅で良港の少ない地中海南岸にあって、島の湾は停泊所として適していたため、急速に交易と商業の地として発展した。カルタゴ滅亡後も、ローマ商人の活躍する地中海—アフリカ交易の中継地として栄え、それはビザンツ時代も続いた。

7世紀のアラブの侵攻はこの島の人口構成を大きく変えたが、その後の北アフリカのイスラーム諸王朝の興亡および地中海の政治動向に伴い、様々な人間集団が歴史の波と共に流れ寄せられてきた。740年にアグラビ朝が北チュニジアを制圧した時、ジェルバ島はハワーリジュ派ルスタム朝の拠点となったし、また944年のチュニスを中心としたシーア派ファーティマ朝に対するやはりハワーリジュ派の反乱と拠点となった。12世紀になるとシチリアのノルマン王朝が地中海南岸の拠点としてこの島を狙うようになり、1135年にノルマン朝のロジェール2世がこの島を侵略した時には、多くの住民が殺されたり奴隷とされた。

1159年にマラケシュから起こったムワッヒド朝が北アフリカ一帯を制圧したが、ジェルバ島内部にまでその支配は浸透しなかった。1207年にムワッヒド朝から独立したハフス朝においても事情は同様で、ジェルバ島は地中海交易の覇権を狙うキリスト教徒諸王朝やイタリア諸都市国家、また十字軍運動の抗争の渦中にあり続け、1310年のアラゴン王による占領時には島の4分の3の人口が虐殺あるいは奴隷にされたという。

15世紀にジェルバ島では地元のエルサムンニ家が一時的に権力を握ったが、16世紀に入るとチュニジア全土の海岸線が、オスマン帝国とスペイン王国をはじめとするヨーロッパ諸国との覇権抗争の前線となった。ジェルバ島は両者の間をかいぐる海賊商人の基地となり、ギリシア人海賊バルバロッサ兄弟、続いてその支配下ドラグートの支配下に入った。地中海の覇権を狙うスペイン帝国の軍事行動に対抗するため、バルバロッサは配下を率いて1533年オスマン帝国に帰順し、帝国の海軍大提督に任じられた。バルバロッサの勢力に脅威を感じたスペインは、1535年にチュニスに侵攻し、ハフス朝を傀儡政権化した。しかしその後1560年にジェルバ島はオスマン帝国に奪還され、さらに1574年にチュニジア全域がオスマン帝国の下に入った⁽⁹⁾。16世紀末になると、シチリア海峡付近でのオスマン帝国とスペイン帝国の覇権争いは急激に下火となり⁽¹⁰⁾、政治的安定を得たジェルバ島は、絹織物や毛織物の生産、またトランス・サハラ交易路の中継地および黒人奴隷貿易等の商業的拠点として復活した。オスマン帝国のチュニジア支配は間接支配で、やがてムラード朝、フサイニ朝と現地派遣官僚が実権を握っていったが、これらの政権は北部の都市拠点を押さえるのみで、中部・南部は掌握しきれなかった。結局、ジェルバ島がチュニジアの土着中央政権に組み込まれるようになったのは19世紀半ばからであり、それも1881年のフランスによるチュニジアの植民地化により1956年の独立まで中断される事となった⁽¹¹⁾。

このような変遷激しい複雑な歴史的経緯は、ジェルバ島を交易の要衝の地にありながら中央政

権の手が内部深くに行き渡らぬ半独立的な地域とせしめ、多元的特徴に富んだ独自の社会構造を現出させたのである。現在のジェルバ島は伝統的な生活形態・社会集団の他に、1980年代から飛躍的に上昇しつつある観光業・観光客という新しい生活形態と社会集団が出現しており、自然環境の分配および社会構造に重要な課題を投げかけつつある。

3. ジェルバ島の人口と居住形態

ジェルバ島入口の最大の特色は、その自然条件と歴史的形成の過程から、居住可能人口の極めて限られたこの島で様々なコミュニティが棲み分け／共存をしてきた事にある。民族的には、アラブ、ベルベル、アフリカ系、宗教的には、スンニー派ムスリム、イバード派ムスリム、ユダヤ教徒、生活形態としては、農業、漁業、牧畜、商業、手工業、最近では公務員、専門職、観光業等があげられる。またひとくちに農業といっても水資源と灌漑用水の使用度により小麦、果樹、野菜、ナツメ椰子等に栽培適正地が細分化される。そのため、諸民族と諸宗教と諸生活形態はモザイク状をなして展開されている。例えば、スンニー派ムスリムも、アラブ、ベルベル、さらにその両方の言語を話すものに分類することが可能であるし、イバード派も同様である⁽¹²⁾。それ故に、数キロ村が異なるごとに異なる民族衣装を着用しているほど、各コミュニティが断片化し棲み分けており、島全体が民族学的宝庫となっている⁽¹³⁾。

しかし、注目すべきなのは、これほど多元的な文化構造が存在するにもかかわらず、ジェルバ島人という一般的統合イメージが存在し、当地人達もジェルビアンとしてのアイデンティティを保有していることである。島外においてジェルバ島人は、一般的に出稼ぎ者で吝嗇で金儲けが巧く結束が固いと見られており、特に八百屋にジェルビアンが多いと言われている。しかしまた、「ジェルビアンの八百屋からものを買うな」、といった彼らの吝嗇に対する揶揄が流布してきている。実際、ホテル経営や絨毯等の輸出入業者等、成功した商売人にジェルバ島出身者が多く見受けられる。

各民族、宗派による特色の強いジェルビアンであるが、ジェルバ島全域にわたって見られる文化的特色のひとつとして、メンゼルと呼ばれる居住形態があげられる。今日においてさえも、ジェルバ島は町や村の集合体というよりは、メンゼル毎に居住する拡大家族集団の統合体の側面が強い。フランス植民地期以前においては、島内で町と呼べる所はユダヤ人居住区であるハーラ・スイゲーラとハーラ・ケビーラしかなかった。現在の首都であるホウム・スークは今世紀に入って町になったが、そもそもはその名前の由来どおり市場地区=Hawmat as-Sūqであった。その他の地理上の町、ミドゥーン、エルマイ、ゲラーラ等は定期市が開催され、町の様々な機能が集約されている場ではあるが、実際に町中に住んでいる人は少数で、多くの人々は、アラブ、ベルベル、ユダヤ教徒の区別なく、町の外の所有地に建てられているメンゼルと呼ばれる屋敷に居住していた。メンゼル居住の様子を以下に述べる。

1) メンゼル・ベン・タンフース

調査者は、ホウム・スークの民族資料館館長である社会学者、アジーザ・ベン・タンフース氏の案内でミドゥーン郊外のメンゼル・ベン・タンフースを訪問する機会を得た⁽¹⁴⁾。ベン・タンフース家は、ベスルール家、ハントゥース家と共にミドゥーン一帯の大土地所有者(アイヤーン)である。ミドゥーンは、小麦、果樹を栽培するアラブ・スンニーの居住地域である⁽¹⁵⁾。メ

ンゼルは敷地を示し、大家族毎に建設されるフーシェと呼ばれる屋敷は、外側からは各隅に塔の突き出た丁度四角い白色の砦のような形態となっており、サボテンの林に囲まれているものも良く見かける。この形態は、ローマ時代の砦に由来し、11世紀以来の打ち続く戦乱と侵略から家族を守るものであった。厚い扉を開けて門を入ると、レモンやブドウが実り、ブーゲンビリアやハイビスカス等の色鮮やかな花々が咲く中庭があり、その中庭に面して部屋が並んでいる。伝統的には外側へ開いた窓は、四隅の塔の部分にのみ、それも馬に乗った人の手の届かない高所に作られ、そこには各家族の家長夫妻が寝た。しかし、厚い土壁と風の流れにより、屋外の強い日差しと暑気が嘘のように室内は涼しい。殺風景な外観と、絨毯や家具が程良く配置された美しく快適な室内とのコントラストが非常に印象的であった。メンゼル・ベン・タンフースの屋敷は、6家族の居住が可能な作りになっている。分厚い外壁には樋が巡らされ、貴重な雨水はすべて地下に集められるようになっており、地下貯水池が家に付属している。多くの場合に屋敷のすぐ東の外側に、ゲスト・ハウスと脱穀場が設けられている。地下貯水池は家屋用のものの他、耕作地用も畑地の真中に作られている。白岩で一定の広さの場所を平らに固め、回りに溝を掘って雨水を貯める工夫がされている。そのほか所有地内には井戸があり灌漑用水路が張りめぐらされている。井戸はかなり深く、高い二本の支柱に固定された滑車をラクダあるいはロバによって稼働させるジェルバ島独特の方式であるが、今ではモーターで稼働するものに次第にとって替わられている。なお、ジェルバ島の水はかなり塩分を含み、塩辛い。

前述の如く、メンゼル居住形態は長く続き、今日でも住所表記の基準となっているし、それに代表される帰属意識は健在である。しかし、現在ベン・タンフース家のメンバーは、ホウム・スークで民族資料館館長をしている博士を除いてすべて首都チュニスに在住しており、このメンゼルの再び大家族で賑わうのは休暇の時のみである。メンゼルの一部は貸し出されていた。ベン・タンフース家に限らず、ベスルール家もハントゥース家も有力者の一族のほとんどは独立後チュニスに去っており、不在地主となっている。

幹線道路を隔てた反対側の耕作地は、ベスルール家に属している。チュニジアの独立にも重要な影響力を持ったこの一族は、既にフランス植民地時代から広大なコロニアル・スタイルの邸宅に住んでいたが、この邸宅でさえ現在は無人のまま放置されている。この一族の主要メンバーもチュニス、あるいはガベスに住んでおり、土地は多くの場合、アラブやあるいはシャウシャーンと呼ばれる黒人奴隷の子孫等の土地を持たない農民に小作に出されている。

4. ハーラ・ケビーラとハーラ・スイゲーラ

島内において、生活形態として農業に一切縁のない集団がユダヤ教徒コミュニティである。ユダヤ人の居住区は植民地時代以前からの唯一の町区と見られる、ハーラ・ケビーラとハーラ・スイゲーラとに限定されている。ハーラ・ケビーラは公式には Es Souani と呼ばれるが、ホウム・スークに隣接しており、貴金属をはじめ陶器、皮革加工品、織物等の商店が建ち並んでいる商店街である。ジェルバ島におけるユダヤ教徒人口の3分の2はここに住んでいる。ハーラ・スイゲーラは、正式には Er Riadh と呼ばれ、ホウム・スークとゲラーラの間地点にあり、残りの3分の1が居住している。白い塀とサボテンに囲まれたメンゼルがここにも建てられ、邪視(悪霊)の侵入を防ぐため白壁には青色で魚や燭台の絵が描かれている。宗教学校もここにある。

ここから1キロばかりの距離に、エル・グリーバ(El Ghriba)と呼ばれるシナゴグがある。93年の事前調査においては、ハーラ・キビーラにおけるインタビューとハーラ・スイゲーラのユダヤ人学校の見学が可能となったが、94年の調査の最大の目的はこのシナゴグにおける年に一度の大祭の取材であった。

まず、1993年4月のハーラ・ケビーラにおけるインタビューの報告からはじめよう。なお現在のチュニジアのユダヤ教徒をその外見から判別する事は、男女を問わず難しい。しかし、話してみるとかれらはヘブライ語とアラビア語を併用するとはいえ、そのアラビア語にSの音をshuと発音するといった、特徴的ななまりがあるので判別できる。とはいえ、調査者には聞き取りがかなり難しく、通訳を介してのインタビューとなった。

イ) ハーラ・キビーラ

インフォーマント1：ファラジ・マズーズ(70才)

職業：銀細工師引退後、ユダヤ学校の給食管理をしている。

日時：1993年4月9日

場所：ハーラ・ケビーラの銀細工店

最初にジェルバ島にユダヤ教徒が来たのは、「エルサレムからで、紀元前586年のこと、バビロンのネブカドネザル王の迫害を逃れてであった。エル・グリーバのシナゴグが建設されたのもこの年だった。毎年一回ユダヤ歴5月5日から10日にこのエクソダスを記念してエル・グリーバの大祭が開かれ、世界中のユダヤ教徒がこの島に集まって来る。この島のユダヤ教徒はエルサレム出身者の他に、15世紀にアンダルシア地方から逃れて来た者達もいるが、彼らは少数派ですぐ見分けが付く。彼らは我々とは違う独自の伝統を持っているのだ。例えば、彼らは、エル・グリーバの大祭には参加しない。祭りの間扉を閉ざしているのだ。彼らは祭りで集められる献金を出さないためにその様にしたのだ。我々は、グリーバを守り、世界中の貧しい同胞のために昔はベセスダ(慈悲の家の意)の壺に金貨を献じる事になっていたのだ。今ではただの木箱に献金するのだがね。ドイツ軍に占領された時に金目の物は皆持って行かれたのだ。

ユダヤ教徒はチュニジアにこの島の他にもあちこちに住んでいる。ザルジースとスファックスには、かなり大きなコミュニティがある。今はチュニジアのユダヤ教徒は3千人くらいだが、昔は10万人以上もいたのだ⁽¹⁶⁾。その多くが、フランスへ移民していった。フランスへ行った理由は、初めはムスリムのチュニジア人と一緒に経済的理由が大きかった。だが、67年からのイスラエルとアラブの戦争が始まると皆恐くなって国を去ったのだ。でも、移民の多くはイスラエルではなくフランスへ行った。イスラエルへ行ったのは少数派で貧しい人達だ。

チュニスとスファックスのユダヤ教徒はジェルバ島とアンダルシア出身者が多い。ザルジースとタタウィン、ベンガルディーン⁽¹⁷⁾のユダヤ教徒にはジェルバ島とリビアのトリポリ出身者が多い。スファックスのユダヤ教徒にはこんな話があるよ。ラビ・フーエタが60年前に話してくれたのだが、昔、スファックスのトルコ人知事が娘のためにジェルバ島のユダヤ人の宝飾職人に特別製の宝飾品を作るように命じたんだが、その宝飾師はムスリムの食事を食べられないのでコミュニティのメンバーを百人連れて行く許可を得たという事だ。

ユダヤ教徒は、貿易商人や職人だから一般には武力的な行動には参加しない。独立党のためには献金もしたが。ブルギバも我々を信頼していた。彼の内閣の初代経済大臣は有名なユダヤ人貿易商だったからね。ジェルバ島でのムスリムとユダヤ教徒の関係はどうかというのかね。どこに

も悪い人間もいるし、良い人間もいるよ。我々は皆チュニジア人だし、隣人のムスリムの友人と穏便に暮らしているさ。」

ロ) ハーラ・スイゲーラ

インフォーマント：ミグエル・M(16才)

日時：1993年4月9日

場所：ハーラ・ケビーラの銀細工店

ハーラ・スイゲーラのユダヤ学校

ハウム・スークのレストラン

5才の時からユダヤ学校に行って、トーラーとタルムードを学習している彼は⁽¹⁷⁾、公立学校に通った事もなくユダヤ教徒コミュニティ以外の生活を知らない。食事はすべてコシェー（ユダヤ教徒に許された清浄食）のみなので、ユダヤ教徒の家以外で外食した事はない。レストランでも飲物以外一切口にできなかった。しかし彼は、先祖代々受け継いで来た自分達の習慣が最も優れている事に疑いを持っていない。「この学校で習っている科目は、トーラーとタルムードの他、数学、地理、歴史、科学、技術いろいろだけど一番大事なのはヘブライ語の読み書きと聖書の勉強だ。ここで食べるパンも全部中で作っている。学校の建物の写真はとっても良いけれど、子供達の顔は映さないようにと、言われた。なぜ外国人を連れて来たのかという人もいるんだ。何の用があるのかと疑う人も多いから。」

「今は学校にも行きながら父の店を手伝っている。やっと銀製品を彫らせてもらえるようになった所だけけど、まだ自分用のだけで売り物にはならない。やがては、モシエ・ニムニのような細工師になりたいんだ。モシエ・ニムニ(1871年—1952年)は、有名な宝飾細工人で当時は島で唯一自分の刻印を作品に押す権利を持った職人だった。僕達は大抵18か19才で結婚する。結婚は家同士で決められる。古い伝統を持っている所はそうでしょうか？日本はどうなの？時々、映画を見に行ったりするけれど、家でテレビを見ている事の方が多いかな。母もそうだけれどユダヤ教徒の女性はよく働く。でも、ムスリムの女性と行動も、見かけも、衣装もほとんど変わりはないよ。いろいろ共有している迷信もあるな。例えば、出産の時に、聖人の名前を空のゴブレットの中に叫ぶんだけど、ユダヤ教の聖人だけでなくムスリムの聖人の名前も叫ぶんだ。ヤー、ムハンマドゥ ラスールアッラー（ヤー、ムハンマドゥ 神の使い）！とか。

エル・グリーバは世界でもっとも古いシナゴークで、あそこのトーラーはイェルサレムからのエクソダスの時にソロモン王の寺院から持って来られた物だ。ユダヤ教徒はチュニジアの有名な歌手や映画スターにもなっている。ラウール・フォルノーやモーリス・ミヌーン、ハナ・ラシェドなんかを知っている？それに、チュニジアの独立のためにもベシース氏やバルーク氏のほか沢山のユダヤ教徒が闘ったんだ。

行きたい外国はイスラエルだ。あそこでユダヤ人は良い暮らしをしているらしい。いつか是非行って見たい。エッ、行った事あるの？すごいな。日本人は初めて見た。日本の物はいっぱい知っている。ソニー、やなんか。ソニーの一番新しいビデオテープを知っていますか？売ってくれない？今度来る時に持って来てよ。僕買いますから。」

5. エル・グリーバ(El Ghriba)

エル・グリーバ(El Ghriba)とは「遠く離れた—gha/ra/ba」という語源から派生した「驚異、奇跡」あるいは「見知らぬ人、客人、外国人等(女性形)」を意味するアラビア語である。この奇妙な名を持つシナゴグこそがジェルバ島ユダヤ教徒の精神的な絆の中心であり、彼らに言わせると、世界のユダヤ教徒の精神的故郷なのである。エル・グリーバの起源については諸説あるが、ファラジ氏の述べた説が一般的である。バビロニアのネブカドネザル2世によって故郷を追われ、エクソダスに出たユダヤ教徒たちはその流浪の旅の果てに、メニクスという島にやって来た。かれらはソロモン王の寺院からトーラーを持って来ていた。ある日、海岸で女の人が石材が流れ着いているのを見つけた。ラビに見せるとそれがソロモンの寺院の一部であったことが分かった。そこで、この地にユダヤ教の永続性の象徴としてシナゴグを建てる事にしたが、建設地を巡って長い間議論が続いた。ところが、過ぎ越し祭りの開けた2日目に聖石が空から降って来た。そこに石材をおいてみると、遙かイエルサレムに通じる道が見えた。現在のエル・グリーバ・シナゴグが建設されたのはその場所で、今でもソロモンの寺院の石材はシナゴグの基盤として聖なる場所になっている。

今一つの説話は、宗教的というよりは民間説話である。昔々、若く、大層美しい処女が何等かの理由で生れ故郷を離れて、この島へやって来た。彼女は誰とも付き合わず、一人で祈りと瞑想に暮れる日々を送っていた。彼女がユダヤ教徒であるのか、ベルベル人なのか、あるいはギリシャ人なのかさえも定かではなかった。ある日、大きな嵐がこの島を襲い、稲妻が彼女の居場所を直撃した。嵐のあと人々が恐る恐る近づいてみると、あたりは、炎と灰塵に帰っていた。しかし、その中であって命の絶えた彼女の体は少しも損傷を受けずに、まるで生きているかのように微笑んでいた。これこそこの見知らぬ処女が聖人であった事の証明であるとして、人々は聖女をこの悲劇が起こった場所に埋めたのである。この場所が後に、エル・グリーバ(奇跡/まれびとの両義がある)と呼ばれるようになった⁽¹⁸⁾。

アーチの下を潜ると、この聖域に入る。エル・グリーバはほぼ四辺形の敷地で道路を真ん中にして、右手に巡礼者のための二階建の宿泊所兼集会所(フندوقク)があり、左がシナゴグとなっている。シナゴグの内陣には、ソロモンの寺院から持ち出された世界で最も古いと信じられているトーラーが奉られている。普段はこの聖域の中は静寂そのものである。入り口のホールにはベンチがいくつも置かれ、人々が静かに聖書を読んでいる。格子で区切られた内陣に入ると、真ん中の祭壇と説教壇を囲むようにした美しい色彩のタイルの壁にそって石台が廻っており、ロウソクと聖油の匂いが立ちこめている。建物自体は何度も建て替えられてきた。聖なるトーラーは、普段は壁の中に納められ、祭りの時だけ取り出される。古くから寄進されてきたため貴重な金貨の収集もあったが、ドイツ軍の占領下にあった時に没収されてしまった。祭りになると、普段とは違って変わった熱気と喧騒がこの聖域を包み込む。

ジェルバ島のユダヤ教徒の数ある祭りの中でも、エル・グリーバの大祭は重要である。この祭りには、ジェルバ島やチュニジアのユダヤ教徒が参加するのみならず、世界各地へとこの島を出て行った者も帰って来るし、巡礼者も世界各地からやって来る。1994年の現地調査は、世界で最も古いシナゴグのひとつとされるエル・グリーバの大祭の調査が主眼であった。祭りは家庭

内で親族と祝う前後夜を入れて5日間続くが、エル・グリーバが中心となるには3日間で、我々が訪れたのは2日目であった。午前には、ジェルバ島ユダヤ教徒コミュニティのプレジデントにしてエル・グリーバ・シナゴグの主席ラビへのインタビューを行い、その後、午後遅くから始まる祭礼の様子を見学した。

イ) ペレズ・トラベルシ氏へのインタビュー

日時：1994年4月28日

場所：エル・グリーバ・フンドック内の事務所

今日、ジェルバ島には200家族延べ850人のユダヤ教徒がいます。しかし、この祭りの間には2千500から3千人のユダヤ教徒が本島を来訪します。1949年以前には、ハーラ・スイゲラには2千人の人口がありましたが、ハーラ・キビーラには、5千人いました。

しかし1960年代には人口は4千人になっています。独立後多くのユダヤ教徒が、移民しましたが、金持ちはフランスに、貧しい人達はイスラエルに移住するか居残るケースが多かったですね。特に1960年代に社会主義者のベン・サラーフが経済大臣になってビジネスの国有化と集中化が行なわれたのも、ユダヤ教徒の大量離島の原因です。しかし、ベン・サラーフ自身もまた、公共労働大臣であったアラブ社会主義政党よりのバルーク氏もユダヤ教徒です⁽¹⁹⁾。

このユダヤ教徒コミュニティは、リビアのユダヤ教徒コミュニティとの関係も1967年までは強かったですね。私の家族自身も2世紀前にリビアから移って来たのです。しかし、リビアのユダヤ教徒達の大半は67年の中東戦争後に、チュニジアのユダヤ教徒がフランスへ移民したように、イタリアへ移民してしまいました。

私の家族は、ジェルバ島の最も古い主席ラビの一族です。他にコーヘン家、ハグダース家があります。現在のジェルバ島のユダヤ教徒人口の80%が、主に銀製品からなる貴金属の加工業と商業に従事しています。残りは、木工製品、生地布、そして染色業に従事しています。農業生活者は、今は一人もいません。

フランスへ移民したジェルバ島のユダヤ教徒との行き来は頻繁にありますよ。パリでは、チュニジア出身のユダヤ教徒は19区に集住しています。私自身フランスへは年3、4回は行きます。ここにいる息子のヴィクトワールは、パリに住んでいます。彼は、1983年にパリに出て建材店を営んでいます。この兄弟達もやはりパリにいます。最初はパリのジェルバ島出身者のための小さな食料品店から始め、そのうちに1984年にはスーパーを開きました。ヴィクトワールも兄弟達から商売を教わって始めたのです。息子は5人いますが、一番下の息子はまだリセに通っています。息子のうちの誰かがこのラビを継ぐかどうかは、インシャアッラー、神の御意志によります。主席ラビは選挙によって選ばれるわけではなく、まあ継承されて行くという側面が強いのです。勿論、コミュニティのメンバーが賛成しての上の事です。その上で、政府が正式に任命するわけです。今日の祭りには、州知事、内務大臣、チュニスのシナゴグの主席ラビも訪問します。

イスラエル＝アラブ和平協定によって、イスラエルのユダヤ教徒も正式に我が国を訪れる事ができるようになりました。既に、イスラエル労働党の第一書記がジェルバ島を訪れています。彼は、チュニジアのユダヤ教徒出身です。また、首相のラビン氏自身、父親はジェルバ島生まれです。ですから、我々ジェルバ島のユダヤ教徒は、和平協定を大変歓迎しています。実は、今年はイスラエルから400人の巡礼者がこの祭りに来るはずでしたが、和平協定後にまた事件が頻発し

たため結局 40 人になってしまいました。でも、世界中からユダヤ教徒が集まって来ますから、どうぞ見て行ってください。祭りは、普段余り外に出ない女性達が、未来の花婿候補と会う機会でもあるのですよ。

ロ) エル・グリーバ大祭

この祭りは、過ぎ越し祭の終わった直ぐ後に始まる。それはまた、ローマの占領に抗した二人のラビの命日を祝う折りでもある。ジェルバ島やチュニジアのユダヤ教徒のみならず、世界各地へとこの島を出て行った者も帰って来るし、巡礼者も世界各地からやって来る。

エル・グリーバでの祭礼は 3 日間続き、その間同じ事が繰り返される。我々が見学したのは、最も賑やかといわれる 2 日目である。大祭の主人公は、山車である。寄進された山のようなスカーフで覆われ天辺に冠をつけた山車は、大祭の期間中日中はフンドックの中庭に据えられ、そこで寄進されたスカーフを対象にオークション（競り市）が行なわれる。フンドックの中庭は、オークションの競り声、競り落としを祝う掛け声、著名なウードの弾き語り歌手の登場、それを取り囲む人々、駆け回る子ども達、果物、菓子、洋服、子供用品等の売店が立ち並び大変賑やかである。「今夜はたのしいお祭りだ。」と女たちは歌い、争ってお金を払って御輿に乗り、外を一巡りしてもらう。フンドックの 2 階には、ブハー（イチジクの蒸留酒）やビール酒を売るバー・ホールからシシカバブー・レストラン、揚げ物屋台等があり、ここも着飾り陽気に飲食している人々で満員の盛況である。1、2 階の中庭に面した部屋々には、各地から来た巡礼者が宿泊している。勿論フンドックのみならずこの期間中、ジェルバ島のホテルは満員となる。

シナゴグの方は、巡礼者が引きも切らさずやって来る。巡礼者は内陣に入り、中央の祭壇にお灯明をあげ、壁の一面に半地下となっているソロモンの神殿の聖石のに詣で、お布施をする。しかし、聖石のある穴蔵に入れるのは女性のみである。彼女たちは自分の願いを書いたゆで卵をこの穴蔵に置いて来る。夕方になると、山車はジェルバ島やチュニスのラビ等のお偉方を付き従えて界限を一巡した後、シナゴグに入る。内陣ではラビや内務大臣の演説が行なわれ、トーラーが読み上げられ、立錫の余地もないほどである。午後 8 時頃になると人々は、三々五々引き上げ始める。

エル・グリーバの祭りは、その発生の神秘性と 2 千年におよぶ歴史的不可逆性の奥深さが与える印象に反して、儀礼の中心は競り市であり、当初想像していたのよりもずっと陽気で、賑やかで、即物的であった。またこの祭りは、エクソダスというユダヤ教徒の共有する根元的体験を表していると同時に極めてジェルバ的な説話にも由来しているという二重性を持っている。何の合図もなく、いつしか千々に散らばって行く人々に交じってやっと捕まえたタクシーでホテルへ帰ったが、イバード派ムスリムだという運転手は、一度も覗いた事はないが、実はこの祭りではフリー・セックスが行なわれるのだと信じており、ユダヤ教徒のやることは訳が分からないとしきりに首をひねっていた。

6. 棲み分け／共生とローカリティ／グローバリティの緊張関係

チュニジアは 1987 年にベン・アリ政権に移行してから、ドストゥール党独裁強化と共に外向型経済開発政策を一層推進している。ジェルバ島も観光開発の波が 80 年代から押し寄せている。

観光客の主流は、バカンスを過ごすヨーロッパ人と週末の歓楽を求めて遊びにやってくるリビア人である。次々と建設中のホテルは、島内の地下水不足促進の原因となって、水資源を巡る開発と環境のバランスの問題を露呈させている。また、この島の多様な民族集団の生活形態や伝統も観光資源として注目を浴びつつある。なかでもユダヤ教徒の集団は、ヨーロッパ人観光客を引き付ける目玉商品とされる可能性が強い。

既に政府は、欧米のジャーナリスト取材にたいして協力的であり、幾つかの取材グループが訪れていた。これらの欧米からのジャーナリストの多くはユダヤ系であった。アメリカから来ていたテレビ・クルーは、ユダヤ教徒である自分の全く知らなかったまさにユダヤ的由来を持つ祭りがアラブ世界の中で2千年も生き続けていた事に驚きを禁じ得なかったようである。その祭りは、ニューヨークのユダヤ系である彼女にとって、全く異文化に属すると同時に紛れもなくユダヤ的なものであった。また、イギリスからのユダヤ系ジャーナリストにとっては、ユダヤ教徒の根源的アイデンティティに遡るこの祭りが、常に贖罪の子羊の暗く荘重なイメージを帯びているヨーロッパのユダヤ教徒の祭りとは正反対の陽気さに満ち溢れている事が大変印象深かったようであった⁽²⁰⁾。

イ) 棲み分け／共生の緊張関係

イスラームという全く異教の世界の直中の、千人に満たないマイノリティ・コミュニティであるジェルバ島のユダヤ教徒が、なぜこのような陽気さと共に独特の伝統を長期間保って来れたのだろうか。そしてまた、このような陽気さ、開放性と他集団に対する根深い猜疑心、閉鎖性とはコミュニティの中でどのように両立しているのだろうか。

ジェルバ島においてユダヤ教徒に対する迫害やムスリムとの間の紛争が皆無であった訳ではない。ノルマン王朝やスペイン王国といった遠い昔ばかりでなく、最近では、ナチス・ドイツの占領時代が記憶に新しい。1940年に反ユダヤ法が導入されると、チュニジアのユダヤ教徒の企業活動が禁止され、資産が没収されたばかりか、18歳から28歳の若者は戦線の労働キャンプに送られた。中でもジェルバ島の財政的被害は大きく、40キロの金塊の提出を命じられ、エル・グリーバの財宝も持ち去られた⁽²¹⁾。キリスト教国からの迫害ばかりでなくムスリム政権時代も、12世紀のムワッヒド朝侵入時には迫害があったし、ズィンミーとして保護されたハフシード朝においても、ジズヤ（人頭税）の他に着物の色を決められたりロバに乗ってはいけないなど差別はあった。こうした制度は、フランス植民地化以降なくなったが、国民国家として独立した今日でも紛争の種がなくなったわけではない。つい昨年にもノイローゼに陥ったムスリムの警官がユダヤ教徒を殺傷するという事件があったし、数年前にもやはりノイローゼ気味だったユダヤ教徒の若者が、アザーン（コーランの詠唱）が煩いといってモスクを焼こうとして小火を出した事もあった。こうした小さな衝突は事欠かない。しかしまた近年の歴史を顧みても、ドイツ軍による占領期にジェルバ島のユダヤ教徒コミュニティは、財政的被害を占領軍から受けたものの、地元ムスリム住民からは何等敵対行為を受けなかったばかりか、財産を守る等の行為を通して庇ってもらったという。差別は厳に存在していたが、ムスリム政権統治下においてチュニジアのユダヤ教徒コミュニティは全般的に、トランス・サハラの実業家としての役割を社会の中で果たし、保護されてきたと言える。しかしそれにしても、これほど資源も居住可能人口も限られる自然条件の厳しいこの小島で、20世紀末の今日までも宗教的アイデンティティを強く保持している異集団間に時々起こる衝突がなぜ、大規模な紛争に発展せず全体的には寛容性を保って抑制されて

来たのだろうか。

従来イスラーム地域において異宗教コミュニティ間の共存がなぜ可能であったのかという問いに対しては、イスラームの宗教としての寛容性が説明として用いられてきた。確かにイスラームはズィンミー制度に基づき、相対的にキリスト教に比して、他宗教に寛容な側面があることは間違いない。ジェルバ島のイバード派ムスリムは、より宗教的に厳格であるので、イスラームの原則に忠実であった、という解釈もある⁽²²⁾。しかしそれではなぜ現実に同じイスラーム地域のレバノンやエジプト、イラク等で異集団間紛争が起るのかという疑問が生じる。最近の多くのイスラーム地域では、宗教的により厳格な原理主義運動が発展するにつれて、異なる者に寛容であるどころか不寛容になり、異宗教集団間の紛争も拡大しつつあるのが現状ではないのか。ズィンミー制度は、ムスリムの優位という前提で常に制度として安定的に保持されてきたわけではなく、政治的紛争は経済的動揺と密接に結びつき、時期によっては異集団の存在を際立たせ、紛争を抑制するどころか、その原因ともなったことは歴史の上で枚挙に暇がない⁽²³⁾。筆者はジェルバ島において諸マイノリティ集団の共存社会がまがりなりにも存続してきた原因は、ズィンミー制度とイスラーム的寛容にのみ求められるのではなく、それも一因であるにしても、むしろジェルバ島の自然環境と人間社会諸集団の関係性の構築そのものにあるのではないかと考えている。

まず、ジェルバ島のユダヤ教徒コミュニティもその他の諸ムスリム・コミュニティも特定のコミュニティが圧倒的に強くなるにすれば、余りに断片的小集団である事があげられる。各自が互いにマイノリティであるようなこれらの断片的な小集団は、独自の生活様式や信条を保全するために島内各地に棲み分けしてきた。おまけに、この孤立断片的なコミュニティは、定住した居住地域の自然環境に応じてその生活形態を特化せざるをえない。地中海性と砂漠性気候の混在しているこの島では農業一つにしても、気候区分と地下水源の所在により、オリーブ、小麦、アンズ、ナツメ椰子等の作物の適正栽培地が限定される。しかし、こうした断片的な小コミュニティは、孤立していると同時に生活必需品や特産品の交易を通して他の地域やコミュニティと関係性を保持して来なければならなかった。例えば、宗教的理由から他集団と共食をしないなどユダヤ教徒コミュニティは極めて閉鎖性の強い集団である一方で、農民としてよりは商人として特化し、島内各地の定期市を渡り歩き諸異集団の生活を繋ぐ重要な役割を歴史的に担って来た。厳しい自然条件下における断片的な小集団の棲み分けによる共存と存続というジェルバ島の特殊性は、まさに各集団の特化された機能によって支えられて来たのである。

しかしこのようなジェルバ島の事例から、文化的マイノリティ諸集団が共存するためには棲み分けが必須であるという「文化的棲み分け理論」を導き出す事はできない⁽²⁴⁾。ジェルバ島に見られる構造は、決して「棲み分け→孤立」ではない。各集団は、一見孤立しているように見えるし、実際他集団に対する警戒や偏見が存在している。しかし、ジェルバ島の諸マイノリティ集団の独自性を保証してきた棲み分け社会構造は、孤立することによってではなく、逆に接触点があることによって形成されてきたのである。すなわち、ジェルバ島のような非常に限られた自然環境の中においては、そもそもどのコミュニティも完全なる自給自足を行うことは不可能である。異なる生業形態を持つ諸集団は、不断に異集団に流通／交易によってさらされることによるのみ、その独自の形態を再生、活性化する事が可能になる。この棲み分けと交流という静と動の緊張関係の中においてはじめて、島全体としての共生構造——各マイノリティ・コミュニティが孤立したモザイク断片として存続するだけではない——の存続がまがりなりにも保持されてき

たのではなからうか。祭りはいつも集団の再生と活性を演出するが、エル・グリーバ大祭の起源説話の二重性——ユダヤ的であると同時にジェルバ的——と、gha/ra/ba というアラビア語源が持つ二重性——遠ざけておきたいと同時に引きつけられる——は、まさにこの構造を表象しているものと言えよう。

ロ) ローカルティ／グローバリティの緊張関係

エル・グリーバ大祭の二重性はまた、ジェルバ島のユダヤ教徒コミュニティのローカル／グローバルな重層構造をも表しているようだ。インタヴューでも明らかのように、コミュニティのメンバーは、極めて閉鎖的であると同時に開放的であった。異教徒に対する警戒心を絶対に解かない反面、異文化の中で国際的に活躍する商人であり、ジェルバ島のコミュニティに執着しつつも海外移民を積極的に行う人々でもあった。こうした二律背反的態度は、コミュニティ・メンバーの単に個性差によるものなのか、あるいは筆者が予測しているように階層差によるものなのか現段階でははっきりしないが、最も保守的と思われるがちな主席ラビの一族が意外にも海外での経済活動に熱心であったことを考慮すると、島内における地位の保全と海外的経済活動は密接な関係があるのかもしれない。興味深いのは、今回調査できなかったが、コミュニティ内部の古くからのジェルバ島ユダヤ教徒と15世紀の移民の子孫であるアンダルシア系ユダヤ教徒との間にある亀裂の存在である。チュニスのユダヤ教徒コミュニティにおいても、「トゥアンサ（チュニス系）」と呼ばれる長くチュニスにいるユダヤ教徒と、1535年のカルロス5世による侵入の際、アラビア語でグラナと呼ばれたイタリアの地方へ移民しその後またチュニスに戻った、「グラナ」系ユダヤ教徒との間に2百年以上にわたる厳しい内紛があった事が記されている⁽²⁵⁾。このような例は、ユダヤ教徒コミュニティが外部からは一つの自治統合体として扱われながらも、その内部にいくつもの社会的断層を抱えていることを示している。

いずれにしても、利害を異にし二律背反的行動をとる複数集団が、コミュニティ内部に存在していることに注目すべきである。各々のグループが示す「地域性」執着と「国際性」誇示の二面性は相反的なものではなく、コミュニティの「内部」と「外部」を相関的かつ有機的に結び付ける、集団の二重機能として捉えるべきであろう。すなわち、ユダヤ教徒コミュニティの実態は、「地域性」・「閉鎖性」あるいは「国際性」・「開放性」のどちらかにあるのではなく、その両者を包含するコミュニティ内部の諸個人・諸階層が形成する断層間の緊張関係そのものにあるのである。従来イスラーム圏の多元社会の様相は、モザイク社会と表現されてきた。しかし、モザイク断片に例えられる各マイノリティ・コミュニティは、決して共通の文化的シンボルの回りにエスニック・グループとして一枚岩的にまとまっているのではなく、内部はさらに様々な差異を統合シンボルとして掲げた、サブ・エスニック・グループに断層化し、さらにそのそれぞれが階層によっても分化している。こうしたコミュニティ内部／外部をめぐる多様な断片＝断層間の緊張を伴った相互補完的作用こそ、地域社会において他集団と全面的に対立せず、しかもディアスポラとしてのユダヤ教徒コミュニティの文化的伝統を地域に埋没させることなく、かつ遠距離交易商人としてグローバルなネットワークを展開させてきたダイナミクスの要因であろう。そして、ユダヤ教徒コミュニティに言えることはまた、程度の差こそあれ商才を持って知られる他のジェルバ島のマイノリティ諸集団にも当てはまる。

ニューヨークからのユダヤ系ジャーナリストにもイギリスからのユダヤ系ジャーナリストにとっても、エル・グリーバ大祭は彼らの外部であると同時に内部でもあった。その断片＝断層間緊

メンゼル・タンフース



ミドゥーンのスーク（市場）



井戸

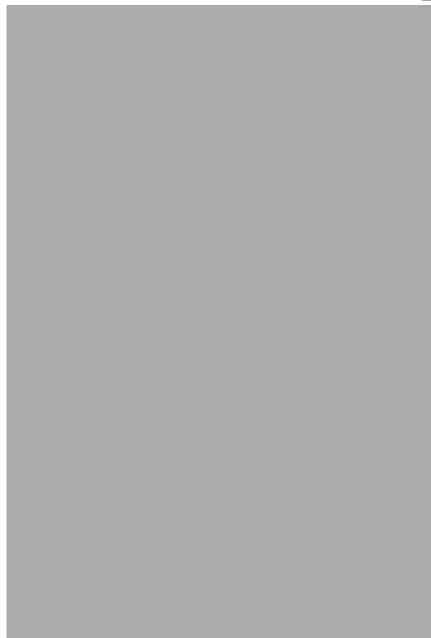




エル・グリーバ入り口
(向かって左がシナゴーク, 右がフンドック)



エル・グリーバ大祭のオークション



エル・グリーバの山車



シナゴーク内陣

(屈んでいる女性は聖石窟に卵と灯明を供えている。)

張関係を自意識化するという作業の中に、ユダヤ教徒コミュニティを存続させてきた文化的アイデンティティの核が存在しているのかもしれない。

7. 終わりに

アラブ世界では現在開発経済政策が進展する一方で貧富の差が拡大し、イスラーム原理主義が過激化している。チュニジアのベン・アリ政権は今の所、警察と軍を背景にした独裁体制で反体制運動を抑えつつ、経済発展を図っている。ジェルバ島においてもこうした状況は例外ではなく、既に二つの問題が表面化している。一つは、前述の如く観光開発による水資源を代表とする自然環境破壊であり、今一つは貧富の差の拡大である。ジェルバ島の断片的であると同時に断層的な多元構造を保証してきたのは、実に微妙な生態系のバランスの上に乗った多様な生活形態間の緊張関係であった。しかし、不在地主が一般化し小作農民が益々増えていき、観光化が進展している現状にあっては、このバランスが崩れていく可能性は極めて高いと言わざるを得ない。

そもそも中東は、ジェルバ島に集約されるような自然環境がさらに大規模に展開される地域であり、ヨーロッパや日本の封建制を成り立たしめたときとされる、孤立的な自給自足農業体制が成立しうる条件は一般的でない。従ってイスラーム社会はその成立の初期から、それ以前に既に形成されていた流通／交易活動を社会の前提として組み込み、幾つかの異なる生態系を持つ広大な文化経済圏間を、都市を結節点として繋ぐネットワーク構造に編成し展開してきた⁽²⁶⁾。本質的に多元的であるこの構造はしかし、非常にバランスの崩れやすい個々の生態系の上に組み立てられてきたものである。このようにイスラーム社会の特色を捉えると、いわゆる「イスラーム的」共存構造とは、その特殊な宗教的寛容性に起因するのではなく、異なる生態系を繋ぐ諸コミュニティ間で多層／多元的に形成された関係性の構築の仕方によるのではないかと考えられる。この関係性を構築し保持する balanサーとしての役割を、ズィンミー制度をはじめとして異集団に比較的寛容なイスラーム的システムが、非ムスリム諸集団を被保護民として差別化したとはいえ、広く果たしていたとは言えるであろう。その意味でジェルバ島の自然環境にもとづき形成された多層・多元的社会構造は、まさにイスラーム社会のフラクタル構造を我々の目の前に提示してくれるのである。

しかし今日、ジェルバ島においても、またその拡大モデルとしてのイスラーム圏各地においても、環境と社会との従来のバランスは急速に崩壊しつつある。国民国家システムはこの過程を加速化させてきたし、イスラーム的共存システムも既にこの解体過程の前に無力である。多元構造を支えてきた精妙なバランスが崩れてしまうとき、ジェルバ島は自らの手足を食いつつ地中海に溶解するのであろうか？あるいは、隣国アルジェリアのように一党独裁体制下での開発経済が貧富の差をさらに拡大していくとき、イスラーム原理主義の高潮が、異端を保持してきたこの島の諸マイノリティ集団をも呑み込むのであろうか？それとも、地域の独自性と国際的普遍性を包含するような統合原理を持つシステムが、新しい balanサーとして登場してくるのであろうか？

[注]

- (1) 民族を紐帯とした一元的国民国家システムと、宗教を基盤とした多元的イスラーム・システムを対比させるこうした見解としては、鈴木董『イスラームの塔からバベルの塔へー

- オスマン帝国における諸民族の統合と共存』リポート、1993年の第6章「イスラム的共存の伝統とその変容」によくその例が表れている。
- (2) 田村愛理「近現代エジプトにおけるムスリム＝コプト紛争」『日本中東学会年報』1986年、「マラヤ・インド人のアイデンティティ探索」『学習院史学』20号、1983年。
 - (3) マイノリティ・コミュニティの調査は常に調査／被調査者の意図とは別に政治的に解釈されうる可能性を伴う。本稿においては、インフォーマントに及ぶかも知れない迷惑を避けるため、公的職務についている者以外は仮名であることをお断りしておきたい。
 - (4) Djilali Sari “L’Evolution Recente de l’Ile de Jerba” *Actes du Colloque sur l’Histoire de Jerba* (Avril 1982) Institut National d’Archeologie et d’Art, 1986, pp. 181-192.
 - (5) 19世紀末—20世紀初頭のフランス保護領下のジェルバ島人口は、3万人から4万人の間であった。Abdessalem ben Hamida, “La Situation Economique et Sociale a Djerba pendant le Premier quart de Siecle du Protectorat”, *Ibid.* 所収, p. 171.
 - (6) フェルナン・ブローデル, 浜名優美訳『地中海』I巻, p. 259. 藤原書店, 1994年。
 - (7) ジェルバ島の交易と市については, 家島彦一「チュニジアの定期市サークル」『イスラーム圏における異文化接触のメカニズム』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1993年度報告を参照されたい。
 - (8) イバード派とは, イスラームにおける最初の宗教的党派で, コーランの規定のままにイスラーム国家の実現を政治に反映させることを主張した, ハワーリジュ派の穏健な分派。今日ハワーリジュ派ではこの一派だけが, リビア西部からアルジェリア南部にかけてとオマーン, ザンジバルに残っている。
 - (9) 1560年のジェルバ島の攻防戦については, フェルナン・ブローデル, 前掲書, 第4巻, 第2章, pp. 134-159に詳しい。また当時の海賊活動については, スタンリー・レーン・プール, 前嶋信次訳『バルバリア海賊盛衰記』リポート, 1981年がある。
 - (10) その原因としてブローデルは, スペインが新大陸に興味を移したこと, オスマン帝国が地中海の東の経営に重点を置いたこと, をあげている。ブローデル, 前掲書, 第5巻, 第5章。
 - (11) ジェルバ島の概観と歴史については, *Encyclopedia of Islam*, “Djerba” New ed. Vol. 1, pp. 458-461. や Muhammad Marzūki 注釈版, Muhammad Abu Rās, *Mūnis al-Hibba : fi ahabār Jerba*, Tunis, 1960. がある。その他, Lisa Anderson, *The State and Social Transformation in Tunisia and Libya, 1830-1980*, Princeton Univ. Press, 1986., Jamil M Abun-Nasr, *A History of the Maghreb*, Cambridge Univ. Press, 1975, 等がチュニジアの複雑な歴史を描いているが, これらを参照して, Rough Guide 社の *Tunisia*, pp. 319-338 がチュニジア通史を要領よくまとめている。また通史理解には適さないが, 前掲, *Actes du Colloque sur l’Histoire de Jerba* の諸論文が, ジェルバ島の各時代の問題を扱っている。
 - (12) 島内における, スンニー／イバード, アラブ／ベルベルの棲み分け構造については, Rene Stablo, *Les Djerbiens - Une Communauté Arabo-Berberedans une Ile del’ Afrique Française*, Tunis 1941, を参照されたい。
 - (13) 各集落毎に特色あるジェルバ島の民族衣装は, ホウム・スークの民族資料館に展示され

ている。

- (14) 1994年4月28日訪問, メンゼルの説明は, 民族資料館館長アジーザ・ベン・タンフース博士による。
- (15) Rene Stablo, op. cit., p. 56の表を参照。
- (16) *Encyclopaedia Judaica*, "Tunis, Tunisia" Vol. 15, pp. 1430-52.によれば, 19世紀末のチュニジアのユダヤ教徒人口は, 5万から10万とされている。フランス植民地時代の1946年では, 約7万1千人のチュニジア籍ユダヤ教徒人口があったが, 1968年には7~8千人に減り, その後も減少した。Chouraquiは, 1946年の人口調査時にはその他3万5千人のフランス籍ユダヤ教徒も居住していた, と述べている。André Chouraqui, *Histoire de Juifs en Afrique de Nord*, Hachette, 1985. p. 402. いずれにしても, マイノリティの人口統計は, 対象たるグループをどのように定義するかによって, 表れる数字が異なってくることに注目すべきである。
- (17) トーラーとは, 律法を意味し, 旧約聖書の最初の五書(モーゼの五書)の別名。さらに, 五書に保存されている様々な法律集, 祭儀規定, 倫理規定やこれらを含む法全体を指す。タルムードは, 成文律法以外の口伝律法を収集した聖典の一つで, 律法を解釈し適用するにあたっての詳細な注釈と議論が記されている。この解釈学を学んだ者が, ラビと呼ばれる律法学者である。
- (18) エル・グリーバの起源伝承については, Kamel Tmarzizet & Jaques Perez, *Djerba Synagogue el Ghriba* Editions Carthacom, Tunis, 1993. pp. 22-26. 今回, ジェルバ島の民間伝承で「何者とも知れない聖女」に対する信仰の例をこの他にも聞いた。メンゼル・ベスルールの耕地の真ん中には「癒しの木」とされている一本のオリーブの古木がある。昔々, 恐らくギリシャ系と思われるが, 出自のはっきりしないファーンティマ・フェニシアと呼ばれた聖女が海の方から来て, この木の近くに庵をおき, 埋葬されたのだが, 病気の子供をこの木の根本に置き, 聖女が埋葬されたという場所にロウソクをお供えすると病は癒されるという。この場所には今でもロウソクの炎が絶えず, 地面が黒く焦げ付いている。
- (19) Chouraquiは, 1909年でハーラ・スィゲーラに950人, ハーラ・ケビーラには2050人のユダヤ教徒がいたと数字をあげている。1946年にその数は, 4296人となり, 1976年では1100人に減っている。Andre Chouraqui, op. cit., p. 431の統計表参照。この数字の差も, 「ジェルバ島ユダヤ教徒」の定義づけの違いによるのであろう。ラビは指摘されなかったが, 1960年代にユダヤ教徒人口が激減した理由としては, 勿論, 67年6月の第三次中東戦争があげられる。この時チュニスでは, 大シナゴグやマツァ(儀式用のパン)を作るパン屋が焼き討ちで灰燼に帰し, トーラーも公衆の面前で破り捨てられるという事件が起こった。
- (20) Jeremy Novick, "Keeping the faith" *The Gardians* 紙 1995, Jan. 21.
- (21) *Encyclopaedia Judaica*, "Tunis, Tunisia" p. 1448. また Chouraqui, op. cit., p. 193-94.
- (22) アジーザ・ベン・タンフース博士もインタビューの中でこの見解を示された。
- (23) イスラーム圏における非ムスリム・コミュニティとホスト・コミュニティ間の経済的動揺と政治的紛争の発生に関連についての筆者の見解は, 前掲論文の他, 田村愛理「マレ

- ー・ナショナリズムにおける政治組織とシンボル操作」『アジア経済』29巻4号, 1988年, を参照されたい。
- (24) 元来今西錦司が提唱した生物学の概念としての棲み分けを社会集団間関係に適用し, 異文化集団間の紛争を防ぐには棲み分けが有効であるとした見解を示したものとしては, 川勝平太『日本文明と西欧近代』(第二部「経済と文化」の構想), NHK ブックス, 1992年がある。
- (25) Encyclopaedia Judaica, “Tunis, Tunisia” p. 1442-43. Chouraqui, op. cit., p. 431によれば50キロの金塊。
- (26) イスラーム世界における文化圏と交易ネットワーク構造形成については, 家島彦一『イスラーム世界の成立と国際商業』岩波書店, 1991年がある。

参考文献

- フェルナン・ブローデル, (浜名優美訳)『地中海』1～5巻, 藤原書店, 1994～1995年。
- 家島彦一, 「チュニジアの定期市サークル」『イスラーム圏における異文化接触のメカニズム』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1993年度報告
- Encyclopedia of Islam, “Djerba” New ed. Vol. 1, pp. 458-461.
- Encyclopaedia Judaica, “Tunis, Tunisia” Vol. 15, pp. 1430-52.
- Institut National d’Archeologie et d’Art Association pour la Sauvegarde de l’Ile de Jerba ed., *Actes du Colloque sur l’Histoire de Jerba (Avril 1982)*, Ministère des Affaires Culturelles, 1986.
- Jamil M Abun-Nasr, *A History of the Maghreb*, Cambridge Univ. Press, 1975.
- Lisa Anderson, *The State and Social Transformation in Tunisia and Libya 1830-1980*, Princeton Univ. Press, 1986.
- André Chouraqui, *Histoire de Juifs en Afrique du Nord*, Hachette, 1985.
- Muhammad Marzūki 注釈版, Muhammad Abū Rās, *Mūnis al-Hibba : fi ahabār Jerba*, Tunis, 1960.
- Jeremy Novick, “Keeping the faith” *The Guardians* 1995, Jan. 21.
- Rene Stablo, *Les Djerbiens : Une Communauté Arabo-Berber dans une Ile del’ Afrique Française* Tunis, 1941.
- Kamel Tamarzizet, *Djerba, Synagogue El-Ghriba*, Edtione Carthacom, Tunis, 1993.

Inter-Communal Relations in Islamic Multi-Cultural Structure : The Jewish Community in Jerba

Airi Tamura

This paper reports about the Jewish community in Jerba island, Tunisia, especially focusing on their feast of el-Ghriba. The el-Ghriba festival, which is held just after Passover, has a long history according to orthodoxical Jewish diaspora legend. At the same time, it has Jerbian local character. This double character of the feast illustrates Janus-like aspects of Jewish minority community : local/global, devided/integral, closed/open society. Inside the island there are several communal groups include the Jewish, which are specialized in certain ways of living. Each community is devided into several strata as well. Oppose to traditional Mosaic theory, the Jewish community in Jerba has been isolated from, but at the same time has cooperated with other minority communities under the limited ecosystem of the island. Intra/inter-communal relationships makes possible to utilize maxially the subtle defferences in limited resources. The intra/inter communal-relationship among devided pieces character-

izes and guarantees the dynamics of Islamic multi-cultural society. Religious multi-cultural structure of Islamic society is not so static as used to believe. Islamic system has worked as the balancer between human societies and fragile ecological circumstances.
